埼臨技だより

発行所　公益社団法人 埼玉県臨床検査技師会　〒330−0072 さいたま市浦和区領家7−14−7
TEL 048（824）4077　FAX 048（824）4095　URL:http://www.sairingi.com/
携帯URL:http://www.sairingi.com/keitai/index.html　Twitter : @sairingi

年 頭 挨 拶

公益社団法人 埼玉県臨床検査技師会
会 長　神山　清志

新年あけましておめでとうございます。

会員・賛助会員の皆様におかれましては、健やかに新しい年を迎えられましたこととお喜び申し上げます。

旧年中は会務運営に多大なるご支援、ご指導、ご協力を賜り心よりお礼申し上げます。

さて、昨年の１月に新型コロナウイルス（SARS-COV2）による新型肺炎（COVID-19）が発生し、瞬く間に世界に蔓延して多くの尊い命が奪われる事態となり、現在も終息の兆しすら見えない状況が続いております。当県においても一度は落ち着きを見せたものの、秋口より新規感染者数が増え続け病院や老人保健施設でのクラスター発生等が軒並み報じられ、通常とはかけ離れた生活や業務に翻弄される日々が続いております。このような中で、私たち臨床検査技師は医師の指示の下で検体採取、遺伝子検査、抗原検査の実施を行い、感染の可能性がある方々が速やかに診断され適切な治療・療養を迅速に受けられるよう努力しております。本来ならば楽しい正月休暇のはずが、新型コロナウイルスのために正月返上で勤務なさった会員も多かったことと思います。

令和２年の上半期は、新型コロナウイルスへの対応対策が暗中模索の状態であったため、各種研修会が延期や中止となり、皆様に多大なるご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。そのような中で、第48回埼玉県医学検査学会の開催につきましては、各方面から心配の声が寄せられましたが、武関雄二学会長をはじめとする学会実行委員の皆様の力で対面式にて無事に開催することができました。その背景には、私たち臨床検査技師は感染対策の専門家でもあることから、感染対策を十分に行うべく会場側と協議を重ね、安全に開催するためのシミュレーションを重ねたことがあり、学会長の運営手腕に敬意を表する次第です。

さて、今年の干支は丑です。十二支の動物の中で最も動きが緩慢で歩みの遅い丑（牛）の年は、先を急がず一歩一歩着実に物事を進めることが大切と言われています。新型コロナウイルスの対策は急を要しますが、私ども埼臨技としては「根拠に乏しい情報」に振り回されることなく、客観的に検証されたものを取り入れ、実施・啓発を行う所存です。もし叶うなら、ワクチンや治療薬が開発されて、オリンピック・パラリンピックが盛大に開催され、国民が従来の生活に戻れるようになってほしいと考えております。

新しい年が、皆さまにとって素晴らしい年となることを祈念して、新年のご挨拶とさせていただきます。

第48回埼玉県医学検査学会を終えて

第48回 埼玉県医学検査学会
学会長　武関　雄二

2020年12月６日（日）大宮ソニックシティにて第48回埼玉県医学検査学会を開催いたしました。今年は新型コロナウイルス感染症の影響により、参加人数制限や一般演題をポスター発表に変更するなど、感染対策を重視した学会運営となりました。参加者は一般市民を含めると658名、感染者が発生することなく無事に開催することができました。学会の運営や開催にご協力いただきました皆様に心より御礼申し上げます。

新年号「令和」に代わり開催された前回の学会テーマは『飛翔』、新たに始まる元号のごとく飛び立とうというテーマでした。本学会はその飛び立った後に、さらに発展させ『技』と『業』を融合して如何に『躍動』するかをテーマと決定し、昨年11月より開催に向けて準備を進めてまいりました。

『躍動』企画　浦和学院高等学校ソングリーダー部：SPLASHによる演技

特別講演では救命救急センターの現状としてさいたま赤十字病院高度救命救急センター部長の八坂先生に「現場の映像から学ぼう」、心臓血管外科手術の現状として自治医科大学附属さいたま医療センター心臓血管外科教授（センター長補佐）の山口先生に「手術の映像から学ぼう」を開催し、普段ではお目にかかれない映像から新鮮な事を吸収できたと感じました。

学会企画では目白大学短期大学部非常勤講師の高田先生に「検査で使える簡単英会話」と題し講演をいただき「伝えたいことをきちんと相手に伝えることを諦めない」ことが重要であるとの内容で大変参考になりました。また、RCPCは自治医科大学附属さいたま医療センター総合医学第１講座教授（臨床検査部部長）の尾本先生を講師にお招きし、活発な討議がなされました。Skill upセミナーは『この技、明日からの業務に活用しよう』を基に各研究班にご協力いただき、明日からの検査に多いに役立つ企画が盛り沢山となりました。

市民公開講演では、サン松本クリニック院長の松本先生に最近講演依頼が特に多い、笑いと健康「君子医者に近寄らず」について５つのキーワードを基にお話しいただきました。さらに、無料検査体験コーナー「物忘れ度チェック」は参加された市民の方々に、想像以上に好評でありました。学会の最後には『躍動』企画として浦和学院高等学校ソングリーダー部：SPLASHによる演技が行われ、学会テーマ『躍動』を締め括るのにふさわしい、はじける笑顔とキレのある演技をご披露していただき、会場にいた多くの方が感動したことでしょう。

最後に、学会の開催にあたり神山会長はじめ技師会理事、一般・賛助会員の皆様、学会関係者の皆様のご支援・ご協力に対しまして学会実行委員一同深く感謝申し上げます。また、コロナ禍にかかわらず多くの一般・ＣＭ演題を登録いただきまして誠にありがとうございました。そして実行委員・学会担当理事の皆様には、新型コロナウイルス感染症の感染防止対策や演題発表形式の変更など、全てにおいて柔軟に対応していただき、大変お世話になりました。心からお礼申し上げます。

第49回 埼玉県医学検査学会のお知らせ

初の Web・口演 ハイブリット開催 !!

期　間 ：12月５日（日）～　会期未定

会　場： 大宮ソニックシティ

テーマ： 前 進　～ 新・時代への発信 ～

第49回 埼玉県医学検査学会
学会長　飯田　眞佐栄

明けましておめでとうございます。第49回埼玉県医学検査学会の学会長を務めさせていただきます、株式会社アムルの飯田眞佐栄と申します。

昨年は、新型コロナウイルスの影響で職場や家庭においても新しい対応や自粛を余儀なくされた方も多かったのではないかと思います。我々も、例年より１か月早い昨年の10月に第１回実行委員会を開催し活動をスタートいたしました。第１回では、学会をいかに安全に開催するかが主なテーマとなり、当日だけでは決めきれませんでしたが、最終的に埼玉県医学検査学会初のWebと口演のハイブリット開催とすることで決定いたしました。

そして、学会テーマを「前進」、サブテーマを「新・時代への発信」としました。現在はコロナ禍で思うような活動ができなくなっておりますが、今後はwithコロナの時代になると言われています。長期戦を覚悟しなくてはならないかもしれませんが、どんな状況にあっても後退することなく前に進むという決意を表しています。今後コロナと共存していかなくてはならない時代に、新しいスタイルの学会を発信出来たらと思っております。

今年はソニックの改修工事のため、大ホール・小ホール・国際会議室・７階～９階会議室が使用できません。会場不足にはなりますが、その分Webを活用して演題は数に制限なく受け付けるつもりでおりますので、ふるって演題登録していただくとともに、ご協力をよろしくお願いいたします。

第49回 埼玉県医学検査学会実行委員

役　　職	氏　　名	勤　　務　　先
学会長	飯田　眞佐栄	株式会社 アムル 上尾中央臨床検査研究所
実行委員長	濱田　昇一	株式会社 アムル 上尾中央臨床検査研究所
事務局長	菊池　裕子	医療法人社団愛友会 上尾中央総合病院
事務局	吉成　一恵	医療法人社団愛友会 上尾中央総合病院
会計部長	石井　直美	越谷市立病院
会計部	小島　徳子	医療法人社団愛友会 蓮田一心会病院
学術部長	小関　紀之	獨協医科大学埼玉医療センター
学術部	大地　康文	さいたま市立病院
学術部	岡倉　勇太	株式会社 戸田中央臨床検査研究所
学術部	内田　真仁	川口市立医療センター
学術部	小宮山　英幸	医療法人社団愛友会 上尾中央総合病院
学術部	軍司　雅代	埼玉県済生会川口総合病院
運営部長	長岡　勇吾	さいたま赤十字病院
運営部	塚原　晃	戸田中央総合病院
運営部	齋藤　貴弘	一般社団法人 浦和医師会メディカルセンター
運営部	杉村　楓	越谷市立病院
運営部	関森　なつみ	自治医科大学附属さいたま医療センター
運営部	田村　誌緒里	学校法人恵済学園 東武医学技術専門学校
学会担当理事	神嶋　敏子	埼玉県立小児医療センター
学会担当理事	飯野　望	埼玉医科大学保健医療学部

埼臨技だより500号発行を記念して

「埼臨技だより」の発行が500号を迎えることとなりました。日頃より会員の皆さまのご愛顧に心から感謝申し上げます。

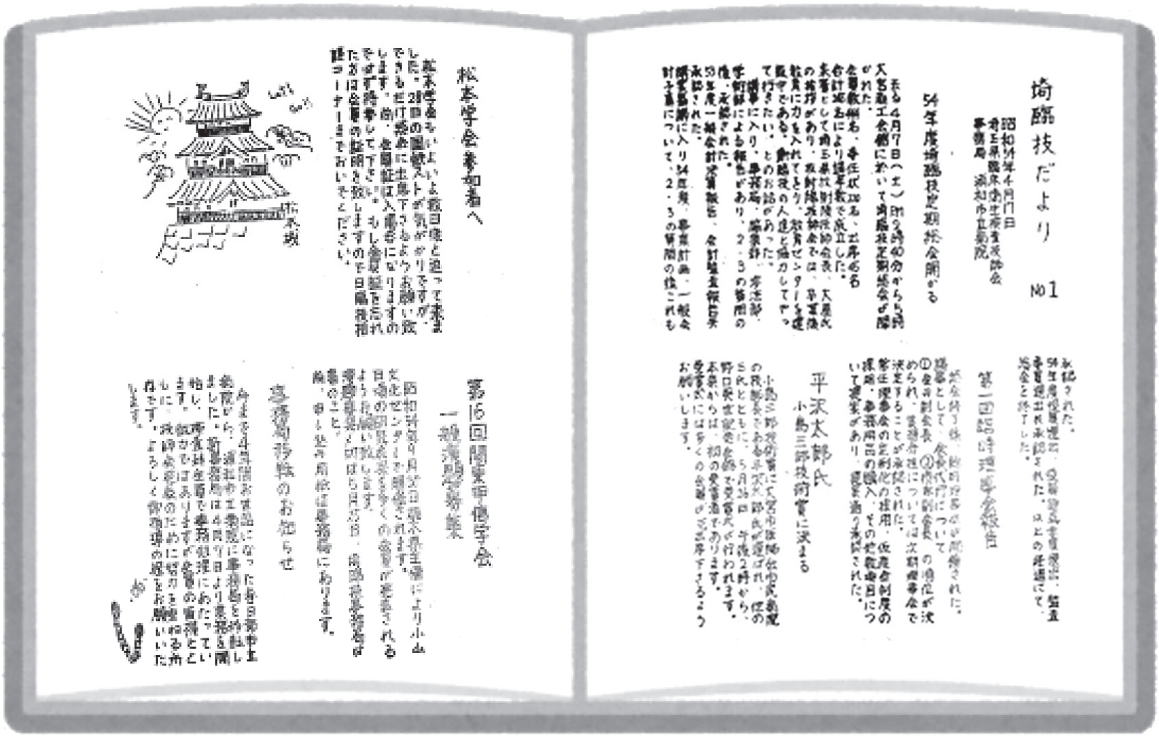
現在3,400部発行される「埼臨技だより」は、全ての会員に届けられ、埼臨技の発行誌の一つとして保管されております。

過去の「埼臨技だより」を振り返る中で、創刊から41年にわたり編集を担当されました諸先輩方に心より敬意を申し上げるとともに、私たち総務部のこの仕事は、埼臨技の長い歴史を伝える大切な役割を担っていることに改めて気づかされ、編集に携われることを光栄に思っております。

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、2020年の東京オリンピックが延期されるなど全てが予測不能な状況に、今もなお全世界が苦境に立たされております。一方で、その渦中ではCOVID-19検査や感染対策など、臨床検査技師が各施設においては欠かせない存在となっていることも事実です。一刻も早く感染の終息を迎えることを願いつつ、次の節目の600号（予定では2029年５月）が発行される頃には、ますます臨床検査技師が活躍する新しい時代であることを祈念しております。

これからも多くの会員の皆さまに埼臨技の情報を広く、わかりやすく、お伝えできるよう努力してまいります。どうぞ今後とも「埼臨技だより」をご愛読ください。

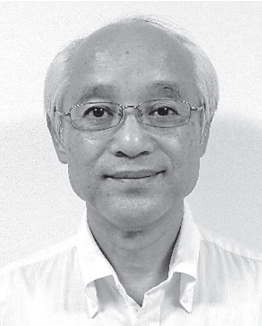
500号担当　菊池　裕子（医療法人社団愛友会 上尾中央総合病院）



埼臨技だより第１号（昭和54年４月17日発行）

埼臨技だより500号発行 おめでとうございます

第16代埼臨技会長（2009－2014）
砂川　進



「埼臨技だより」500号発行、お祝い申し上げます。

埼臨技が発足したのは昭和28年（1953）、当時は55名の会員で誕生したそうです。それから26年後の昭和54年（1979）に「埼臨技だより」１号が発行されました。当時の会員数は500名を超えたところでした。当初は手書き、手作りの原稿を輪転機で刷り上げ、会員へ配布していたようです。現在から思えば、Wordやインターネットの無い時代に毎月定期的に発行されてきたことは大きな驚きであり、誇るべき業績でもあると思います。

今回の500号では会員数3,200名を超え、「埼臨技だより」は42年の歩みを続けてきたことになります。創刊から今日まで、編集を担当されました諸先輩各位に心より敬意を表します。

掲載内容は、会員のニーズに応じ工夫され、情報提供の在り方、速報性、経済性などを考慮し、移り変わってきました。

「埼臨技だより」は進化発展していくと考えますが、課題としては政府のデジタル社会への促進で紙媒体の在り方が問われていくと考えます。ほとんどの会員がスマホを持つ時代、今後の展開が気になるところですが、紙のよいところもあり、悩ましいですね。

ますます会員のための「埼臨技だより」となることを祈念申し上げます。

第17代埼臨技会長（2014－2018）
津田　聡一郎

「埼臨技だより・第500号」の発行、まことにおめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

400号発行を記念した平成24年（2012年）９月号が創刊１号から400号までを詳しく特集してくれました。興味を持たれたら是非、埼臨技ホームページのバックナンバーでご覧ください。それからの８年４ヶ月をだよりの記事を拾って振り返ってみます。

平成24年当時、民法改正に伴う一般社団法人から公益社団法人への移行申請の真っ最中で、平成25年２月号に法人移行申請完了が報じられました。翌３月、埼臨技は法人化60周年を迎えています。同年７月号で埼臨技ロゴマーク募集を広く公募しました。

平成26年１月号で１月６日付けにて公益法人としてスタートしたことが発表され、２月号にはロゴマークの決定が報じられました。３月25日に法人化60周年と新法人移行をお祝いする会を開いた事を４月号で報告しました。同年６月号には埼臨技事務所の老朽化が記事として伝えられ、改修事業着手をお知らせしました。同月開催の総会時、移行手続きの無事を見届けた砂川会長から私・津田が会長を引き継いで７月号にご挨拶いたしました。

平成27年５月号に事務所のリフォームが４月に完了した記事が載せられました。同年９月号に須永隆雄・元会長のご逝去が報じられました。

平成28年７月号で日臨技総会時に蒲池正次・元会長の日臨技有功賞功労賞の受賞を報じ、翌々月の９月号に突然の訃報が届いたのには大きなショックを受けました。

平成29年４月号に日臨技関東甲信支部・首都圏支部合同学会を埼臨技が担当、10月開催を案内しました。

平成30年７月号で６月開催の総会で会長が津田から神山清志への交代を報じました。

平成31年３月号に新たな事業として第１回女性技師研修会の開催が報告されました。これは過去２回埼臨技有志の会「あじさいの会」として活動してきて、今回から女性技師企画研修委員会としての正式な事業スタートとなったものです。翌４月号には更に青年部委員会による青年部研修会開催の案内も出され、新しい活動が楽しみになりました。また同年５月には元号も「令和」と代わり、益々の新しい動きが期待されました。

令和２年１月号の神山会長新年挨拶には、検査と健康展の全国メイン会場（主催は日臨技、担当が埼臨技）を担うという意気込みが込められましたが、その時期以降は新型コロナに振り回される日々を送ることになってしまいました。

この500号が会員皆さんの手元に届く１月中旬は、まだコロナ禍が生活リズムに大きな影響を与えていると思われますが、そこから始まる令和３年はきっと埼臨技活動が再び盛んになってくるものと信じて、この８年４ヶ月のまとめとさせていただきます。

令和２年度　第１回検査室管理運営研修会のお知らせ

初体験・コロナ禍対応

～ 気になりませんか？ 他施設の状況 ～

検査室管理運営委員会
委員長　笹野　勝年

検査室管理運営委員会では管理職のみならず、新人からパート責任者の方々まで検査室を運営する皆様を対象に研修会を企画しております。通年ですと、９月にも開催していましたが、本年度はCOVID-19の影響により中止となりました。

令和２年度 第１回 検査室管理運営研修会を「初体験・コロナ禍対応 ～気になりませんか？ 他施設の状況～」と題しまして、開催いたします。

COVID-19が瞬く間に世界中へ拡大し、日本国内でも感染者が増加していく中、医療現場では様々な問題を抱えながら必死に患者対応にあたっていました。臨床検査技師である皆さんも、それぞれの施設内で何ができるかを模索しながら対応してきたことと思います。初めてのことで正解がない中、臨床検査技師がどのように関わっていたのか、他施設の話を聞く機会を作りたいと思い、今回企画しました。検体採取を行う際の工夫や注意点、生理検査室や採血時の対応等、体験談を３名の方に話していただきます。

今回、感染対策の観点より、Webでの開催といたします。参加を希望される方は日臨技HPよりお申し込みください。

開 催 日 ： 令和３年２月16日(火)　19：00 ～ 20：00
Webにて開催（Zoom使用）
参 加 費 ： 無 料
募集人数 ： 80名

お知らせ その２

『精度保証施設認証』の更新、新規取得のお知らせ

埼玉県精度保証施設認証委員会
委員長　阿部　健一郎

日本臨床衛生検査技師会、日本臨床検査標準協議会では、「標準化され、かつ、精度が十分保証されていると評価できる施設」に対し、精度保証施設として認証する制度を行ってきました。現在、47都道府県で851施設が認証され、埼玉県では39施設が取得しております。なお、今回の医療法が改正（医療法施行規則の一部改正；厚生労働省令第93号）に伴い、改正法に基づいた新しい基準での施設認証制度を立ち上げるよう準備を進めていましたが、コロナ感染症拡大による混乱を鑑みて新制度による施設認証の開始は令和４年４月からとなっています。よって、令和３年４月からの認証対象（新規・更新）施設に対する審査は、旧制度にて実施致します。

今回更新に当たる施設は23施設です。承認施設は更新時期を今一度ご確認ください。また、新規申請もこの時期に行っています。なお、埼玉県では申請可能な施設が68施設あります。申請条件を下記に示しますが、必要書類は11月下旬より日臨技ホームページからダウンロード可能となります。意外と簡単に作成できますので一度ご検討されてはいかがでしょうか。

【申請基準】　※ 詳細は日臨技ホームページを参照ください。

１．日臨技主催の精度管理調査に、申請時より遡り２年以上連続参加している。
２．施設内で実施している項目は全項目、臨床検査データ標準化事業に参加している。
３．日臨技精度管理調査の結果で、許容正解項目が２年連続90％以上である。
４．都道府県技師会主催の精度管理調査に申請時より遡り２年以上参加し、２年連続80％以上である。
５．基準的測定法が確立している項目は、原則として標準化を行い実践している。
６．認証範囲対象項目は全項目、内部精度管理を行いXbar-R管理図等を作成しその記録がある。
７．内部精度管理については、明らかに許容範囲を超えた異常値が出た場合の対応マニュアルを作成している。
８．外部精度管理調査（日臨技主催および都道府県主催）評価結果で許容正解を外れた項目については、原因の究明、是正処置、監督者の確認等の記録（様式）がある。
９．検体検査室に常勤の臨床検査技師がいる。
10．申請者または精度管理責任者が、日臨技生涯教育研修制度を修了している。あるいは審査基準に定める単位を取得している。
11．精度管理に関連する研修会等に毎年１回以上参加している。

研究班研修会報告

テーマ　「新型コロナウイルス感染状況における献血の状況」と「輸血副反応と感染症」について

主催　輸血検査研究班

実施日時：令和２年11月13日　　19時00分～20時45分
会　　場：大宮ソニックシティ 603号室　　点数：専門教科－20点
講　　師：小泉　陽平（埼玉県赤十字血液センター 事業推進一部献血推進課）
　　植木美代子（埼玉県赤十字血液センター 学術情報・供給課）
参加人数：会員35名
出席した研究班班員：久保居由紀子　渡邉一儀　宮澤翔子
研修内容・感想など

世の中の状況を踏まえ、トピックスとして「コロナ」に関連した研修会を実施した。コロナ感染が流行している中で、輸血にとって要である献血が、どのような状況なのかを小泉氏による講演が行われた。献血計画（必要量をもとにした予定献血量）に対し、献血実績は、埼玉で97％であった。４月が87％と最も低く、その後、99％まで回復していた。移動献血の実施率は中止要望で59％まで落ちていた。積極的なお知らせ等の対応と、献血場所では、検温、消毒、換気などの感染予防が徹底されていた。献血者低下はニュースでも取り上げられていたのを目にしていたが、実際には医療機関へほぼ大きな変化なく供給されている。献血に関わっている方々の努力と献血者に感謝したい。

つづいて輸血副反応と感染症について植木氏による講演が行われた。輸血副反応（旧輸血副作用）は、輸血をすることによって生じる有害事象で、頻度は高くないものの完全に回避することはできない。主に2019年の統計データが提示された。症状ではアレルギー関連が68％を占めていた。製剤別ではRBC35％、FFP40％、PC20％であった。感染では、ウイルスだけでなく細菌感染も重大な副反応となりうる。細菌感染は特にPC製剤で発生していた。医療機関でできる安全対策として、製剤の入庫時と出庫時の外観試験を徹底するとともに、ガイドラインにもあるように使用済み製剤の冷蔵保存も原因究明と患者への迅速対応につながるとして実施することが望ましい。

今回の研修会では、検査とは別で輸血管理部門に対応が求められる知識を学ぶことができた。今後も「輸血療法」に関連する幅広い情報と知識・技術を提供できる研修会を企画していきたい。

（文責：渡邉一儀）

テーマ　一般検査鏡検実習　基本から症例まで

主催　一般検査研究班

実施日時：令和２年11月15日　　10時00分～16時00分
会　　場：学校法人 恵済学園 東武医学技術専門学校　　点数：専門教科－20点
講　　師：藤村　和夫（埼玉県済生会川口総合病院）
　　室谷　明子（埼玉医科大学国際医療センター）
　　小関　紀之（獨協医科大学埼玉医療センター）
　　柿沼　智史（川口市立医療センター）
　　佐々木菜緒（越谷市立病院）
　　小針奈穂美（埼玉医科大学病院）
　　中川　禎己（小川赤十字病院）
　　渡邉　裕樹（埼玉医科大学総合医療センター）

参加人数：会員25名
出席した研究班班員：藤村和夫　室谷明子　小関紀之　柿沼智史　佐々木菜緒　小針奈穂美
中川禎己　渡邉裕樹
研修内容・感想など

2020年11月15日、一般検査鏡検実習が開催され、初心者の方を中心に、質問など多く活気のある実習であった。

午前中は講義を中心に行われ血球類については柿沼氏、上皮・悪性細胞については佐々木氏、円柱については渡邉、結晶類については小関氏より、各成分の形態学的特徴や鑑別ポイント、臨床的意義についてそれぞれ解説があった。

午後は、午前中の講義を踏まえて、血球類、上皮・悪性細胞、円柱類、その他の４セクションに別れ、尿沈渣標本について45分間ずつ鏡顕実習を行った。血球類では糸球体性赤血球と非糸球体性赤血球などの鑑別、上皮・悪性細胞では基本的な上皮細胞の鑑別から症例標本などを含む実習であった。円柱類では各円柱の鑑別、その他ではマルベリー小体など、尿沈渣所見が重要になる成分も含まれ、参加者には稀な症例を経験できるいい機会であった。

コロナ禍でオンラインによる研修会が多くなる中、実際に尿沈渣標本を鏡検することで得られることも多く充実した実習であった。また、会場の設営などご協力いただいた東武医学技術専門学校の先生方にはこの場をかりてお礼申し上げます。

（文責：渡邉裕樹）

テーマ　令和元年度精度管理報告とH-FABPについて

主催　血清検査研究班

実施日時：令和２年11月18日　　19時00分～20時30分
会　　場：大宮ソニックシティ 604号室　　点数：専門教科－20点
講　　師：藤代　政浩（獨協医科大学埼玉医療センター）
山本　幸稔（関東化学株式会社 試薬事業部ライフサイエンス部技術課）
参加人数：会員13名
出席した研究班班員：渡邊剛　菅野佳之　大坂圭司　冨田耕平　岡倉勇太　末次遼太　田中亜紀
研修内容・感想など

今回は令和元年度精度管理報告（血清）が行われた。全体的には良好な結果であったがＤ判定となった施設がいくつかあった。Ｄ判定となった施設では入力ミスによりＤ判定となってしまった施設があり、結果入力時にダブルチェックし、入力ミスが無いようにして欲しいと報告があった。項目により試薬間差があり、中でもTSHは１ステップ法と２ステップ法では結果が大きく変わってしまう。これは管理試料中に含まれる物質によるもので、管理試料を使用している限り差があることは致し方ないことと報告があった。しかし、影響を及ぼす物質が入っていない患者検体では２つの方法で結果が乖離することは無いとのことであった。来年度からは管理試料が変更となるのでこのような事象は起こらなくなるであろうと報告があった。

続いて「H-FABPについて」の講義があった。H-FABPは急性心筋梗塞等で血中に分泌される低分子可溶性蛋白である。H-FABPは骨格筋より５～20倍高く心筋に含まれており、急性心筋梗塞など心筋の壊死により速やかに血中へ排泄される。急性心筋梗塞が起こった時はトロポニンやミオグロビン、CK、CK-MBなどがあるが、H-FABPは胸痛後２時間以内に上昇するので他の項目より早期に上昇し、急性心筋梗塞の病態をより迅速に判断できる。しかし、腎機能が悪い方や横紋筋融解症、不安定狭心症など他の疾患でも上昇するので注意が必要である。他の項目も含めて判断する必要があるとのことだった。

今回の精度管理報告やH-FABPについての講演で聞いた内容を今後の検査に活かしていきたい。

（文責：田中亜紀）

テーマ　病理検査の基本を学ぼう　～ 固定について ～

主催　病理検査研究班

実施日時：令和２年11月27日　　19時00分～21時00分
会　　場：浦和コミュニティセンター 第13集会室　　点数：専門教科－20点
講 演 １：「ホルマリン取扱い業務に関連する法律」
講　　師：今村　尚貴（川口市立医療センター）
講 演 ２：「新たな施設で、ホルマリン作業環境対策の取り組み」
講　　師：森田　繁（さいたま市立病院）
講 演 ３：「当院でのホルマリン運用について」
講　　師：松本　祐弥（獨協医科大学埼玉医療センター）
参加人数：会員29名
出席した研究班班員：岡村卓哉　関口久男　森田繁　荻真里子　細沼佑介　高橋俊介
今村尚貴　小島朋子　谷内里穂　三鍋慎也

研修内容・感想など

今回は「病理検査の基本を学ぼう ～固定について～」をテーマに、ホルマリンの取り扱いを中心に、関係法規から実際の現場での運用に至るまでを３人の講師により講演が行われた。

講演１は、今村氏より「ホルマリン取扱い業務に関連する法律」についての講演であった。臨床検査業務は多岐にわたる法律の下に遂行されており、中でもホルマリンの取扱いは性質上、多くの法律の制限を受ける。これらは私達業務実施者の安全を守るものであり、遵守することの重要性を伝えられた。

講演２は、森田氏より「新たな施設でホルマリン作業環境対策の取り組み」と題して、新施設建設時に経験されたホルマリン対策について講演であった。全体換気と切り出し台・撮影台等の局所排気を組み合わせ、効率的な換気状態を構築することに成功した。自施設のホルマリン換気対策を見直す上で、大変参考になる情報が提供された。

講演３は、松本氏より「当院でのホルマリン運用について」と題し講演が行われた。ホルマリン、エタノール、生食の取り違い防止のため、色素入の固定液を採用し、視覚的に識別できる工夫をされているとのことであった。また、ホルマリン管理について、病理検査室のみならず臨床も含めて病院全体として取り組んでいるとのことであった。

フロアからは、「連休前の検体の取扱いについて(固定時間の考慮)」や、「ホルマリン固定後のアルコール濃度」に関する質問があった。日常の業務に直結する内容であり、関心の高さが伺えた。今回の研修が、日常業務に少しでも役に立てられれば幸いである。

（文責：三鍋慎也）

テーマ　自動分析装置を使用した臨床化学の比色分析について Part1

主催　臨床化学検査研究班

実施日時：令和２年12月３日　　18時00分～18時30分
会　　場：Web環境　　点数：専門教科－20点
講　　師：巖崎　達矢（東松山医師会病院）
参加人数：会員39名
出席した研究班班員：永井謙一　北川裕太郎　小林麻里子　羽田幸加　石川純也　巖崎達矢
廣瀬良磨　笹原美里

研修内容・感想など

今回は、巖崎氏より「自動分析装置を使用した臨床化学の比色分析について Part1」として講演があった。

分光光度分析法は、現在の自動分析装置の測定法としては一般的であり、血清中濃度

10^{-6}mol/L（μmol/L）以上を測定している。目的成分の濃度を測定するには吸光度を用いたLambert-Beerの法則により算出され、吸光度はモル吸光係数・血清量・目的成分濃度に比例し、最終液量に反比例することが、測定項目による違いや特徴を理解する上で基盤となった。

また、分析には相対誤差の小さい吸光度範囲を使用することが重要であり、検量線作成時には特に誤差による影響を理解しておくことが必要である。

２波長測定では、試料の濁りや色調の影響を軽減するだけでなく、光量の補正にも重要な役割を果たしており、単波長の特徴と比較することで、普段自動分析装置で行われている干渉物質やエラー回避の原理について学べた。さらに、２ポイント測定では、検体盲検を差し引くことで色調の影響を回避することができ、二波長測定と組み合わせることで吸光度の相対誤差を低下させる仕組みが自動分析装置による測定の大きな特徴である。

今回は比色分析における基礎について原理から特長までの内容で、次回Part2では実践的な普段の分析で遭遇する疑問や、今回学んだ内容の応用について、引き続き巌崎氏に講演をお願いしている。

また、今回の研修会からWebセミナーとしてオンライン研修会を行ったが、参加者から質問が多くあり、普段質問できない参加者にとっても有意義な研修会となった。今回の研修会で得られた情報や知識を今後の業務に役立てていただければと思う。

（文責：北川裕太郎）

テーマ　自動分析装置を使用した臨床化学の比色分析について　Part2

主催　臨床化学検査研究班

実施日時：令和２年12月10日　　18時00分～18時30分
会　　場：Web環境　　点数：専門教科－20点
講　　師：巌崎　達矢（東松山医師会病院）
参加人数：会員53名
出席した研究班班員：永井謙一　北川裕太郎　小林麻里子　羽田幸加　石川純也　巌崎達矢
廣瀬良磨　笹原美里

研修内容・感想など

自動分析装置を使用した臨床化学比色分析についてPart2として、巌崎氏より検量係数と測定感度を中心に講演が行われた。

検量係数を実際に計算し確認する機会が少なくなっている中、計算方法と得られた値の解釈、利用法など詳しく説明があった。検量係数と測定感度はLambert-Beerの式を基に吸光度と濃度の関係で「同じ濃度の標準液の時吸光度が高い程検量係数が小さくなる」、「検量係数が小さい程同じ吸光度のバラツキのとき濃度変化は小さい」といえる。つまり、同じ濃度であれば吸光度が大きい程感度が良くなり、感度があれば多少吸光度が動いても測定値に影響しにくい、低い濃度まで測定できるということである。実際にクレアチニン測定を例に挙げ、吸光度を大きくする（血清量を増やす）と検量係数が小さくなり、吸光度の変化はあるが、変動係数も小さい（測定値に影響しにくい）結果となっていた。ここでもLambert-Beerの式が登場し、吸光度を大きくする技を式に従って解説があった。

また、自動分析装置から得られたキャリブレーション結果（検量係数、吸光度等）の記録方法・活用方法について紹介された。吸光度のズレとそれに伴う測定値の変化を確認でき、日々の精度管理に役立つと感じた。

今回の講演内容は、Part1の基礎の内容を振り返りながら、実務と結びつけられていた。自動分析装置のパラメータを変えて実験することはハードルが高いと感じるかもしれないが、試薬量、試料量、用いている波長、測定原理など理解する良い機会でもあるし、今回の研修会の復習にもなるので、可能であれば自施設で試してほしい。

（文責：小林麻里子）

令和２年度
公益社団法人埼玉県臨床検査技師会
第11回　理事会議事録

日　時：令和２年12月10日（木）19時00分より
場　所：埼臨技事務所
さいたま市浦和区領家７－14－７
議　題：Ⅰ．行動報告　Ⅱ．報告事項
Ⅲ．承認事項　Ⅳ．議題
出　席：現地にて出席
（理事）神山　松岡　猪浦　小山　濱本
長澤　菊池　飯野　伊藤　笹野
塚原　松嵜　石井　神戸　長岡
久保田
（監事）遠藤
Zoomにて出席
（理事）矢作　長谷川　松尾
（監事）細谷
欠　席：（理事）山口　阿部　神嶋

本日の理事会の出席者は21名であった。理事の出席者は19名で、現在数22名の過半数に達しており、定款第33条第１項の決議を行うに必要な要件を満たしていることを確認した。

議長は、定款第32条第１項より、神山清志会長が務めることとなった。

Ⅰ．行動報告（令和2年11月12日～令和2年12月9日）

11月12日（木）令和２年度第10回理事会：
神山、矢作、松岡、猪浦、小山、濱本、長澤、山口、神嶋、菊池、松尾、伊藤、笹野、塚原、松嵜、石井、神戸、阿部、長岡、久保田、飯野、長谷川、遠藤、細谷
11月12日（木）日臨技関甲信・首都圏支部合同支部内連絡会議：神山
11月14日（土）日臨技予算委員会：神山
11月16日（月）令和２年度第２回女性技師企画研修委員会（ZOOM会議）：
猪浦、山口、神嶋、菊池、石井、伊藤
11月20日（金）第48回埼玉県医学検査学会第14回実行委員会：神嶋、飯野
11月27日（金）第49回埼玉県医学検査学会第２回実行委員会：飯野
12月１日（火）日臨技政策推進ＷＧ会議：神山
12月４日（金）日臨技支部長会議：神山
12月５日（土）日臨技理事会：神山
12月５日（土）日臨技役員役務伝達会議：神山
12月６日（日）第48回埼玉県医学検査学会：
神山、矢作、松岡、猪浦、小山、濱本、長澤、山口、神嶋、菊池、松尾、伊藤、笹野、塚原、松嵜、石井、神戸、阿部、長岡、久保田、飯野、長谷川、遠藤

Ⅱ．報告事項

１　事務局
1）11月30日（月）、動産保険、事務所火災保険（令和３年１月９日満期）の更新手続きを行った。
2）公益財団法人 黒住医学研究振興財団より第56回「小島三郎記念技術賞」と第40回「福見秀雄賞」の推薦依頼が届いた。
3）11月23日（月）埼玉県主催、埼臨技共催のPCR実践講習会が埼玉医科大学病院で行われた。受講者７名。

２　総務部
1）「埼臨技だより」第499号12月15日発行予定。
2）11月16日（月）令和２年度第２回女性技師企画研修委員会ZOOM会議を開催した。
（別紙資料１）

３　事業部　特になし

４　学術部
1）生涯教育プログラム２・３月分を埼臨技だより12月号に同封予定。
2）10月29日から11月25日までの間、断続的に編集委員会を開催した。（別紙資料２）

５　精度保証部
1）埼臨技だより12月号に日臨技精度保証施設認証の更新、新規取得のお知らせを掲載する。

６　会計部
1）令和２年度正会員費４名20,000円、入会金４名分4,000円、合計24,000円の入金があった。
2）石井印刷へ、埼臨技だより第498号印刷代116,963円を支払った。

７　精度管理委員会　特になし

８　一都八県会長会議　特になし

９　日臨技関甲信支部
1）11月12日（木）、日臨技関甲信・首都圏支部合同支部内連絡会議が開催された。
（別紙資料３）

10　日臨技　特になし

11　第48回埼玉県医学検査学会
1）11月27日、第48回埼玉県医学検査学会第14回実行委員会が開催された。
（別紙資料４）

2)12月６日、第48回埼玉県医学検査学会が開催され、658名の参加があった。

12　第49回埼玉県医学検査学会

1)11月27日、第49回埼玉県医学検査学会第２回実行委員会が開催された。

（別紙資料５）

Ⅲ．承認事項

１　事務局

1)会員動向(令和２年度分)

令和２年12月１日現在

会員数 3,259名[令和元年度会員数3,144名]

（新入会員 221名）

賛助会員　78社[令和元年度 81社]

承認された。

2)令和３年度定時会員総会の開催日について

令和３年６月10日(木)大宮ソニックシティ401・402号室で開催としたい。

承認された。

3)事務員の冬季賞与について

承認された。

２　総務部　特になし

３　事業部　特になし

４　学術部

1)地区別研修会の中止について

コロナ渦での開催はリスクが高く、オンライン開催では地区別研修会の趣旨から外れるため、今年度の地区別研修会を中止としたい。

承認された。

５　精度保証部　特になし

６　会計部　特になし

７　精度管理委員　特になし

８　第48回埼玉県医学検査学会　特になし

９　第49回埼玉県医学検査学会　特になし

Ⅳ．議題

１　事務局　特になし

２　総務部　特になし

３　事業部　特になし

４　学術部　特になし

５　精度保証部　特になし

６　会計部　特になし

以上で本日の議事を終了し、議長は協力を謝して閉会とした。

あ　と　が　き

本号は記念すべき第500号である。「年頭所感」と「あとがき」とで神山で始まり神山で終わる号となってしまった。

埼臨技だよりは私が中学生であった昭和54年４月に第１号が創刊され一度も欠稿することなく500号が発刊された。毎月原稿を集めて何度も校正して期限内に入稿する。総務部の「だより」担当理事は、さぞかし大変で胃が痛いことだったと思う。また、いつも入稿がギリギリになるのに、発刊予定日を越えることなく納品し続けてくれている石井印刷にも深謝いたすところである。

さて、何を書こうかと思い400号を引っ張り出してみた。素晴らしい！ 総務部が一丸となり記念号にふさわしい内容だった。それまでの歴史が細かく記されておりとても参考になる。400号は埼臨技のＨＰにも掲載されているので是非ともご覧いただきたい。

本号は・・・コロナのせいにしてはいけないのだが、理事会活動が極めて行いにくい状況で記念特集の編集準備が不十分であった。そのような中で、砂川元会長、津田前会長より原稿をいただくことができて、何とか体裁を整えることができた。お二方のご協力に厚く御礼申し上げます。

さいごに、たった８ページくらいの「だより」ではあるが、当会の事業や研究班の研修会報告、公益法人として会員や県民に公開する必要がある理事会議事録、会員が自由に投稿できる「ひろば」、etc・・・毎回とても充実した内容であると手前味噌ながら思っている。くれぐれも、読まずに「ごみ箱の餌」にはしないでくださいね。

（会長 神山清志　記）